

樹種名	ニッケイ	
科 目	クスノキ科	
学 名	<i>Cinnamomum</i>	
分 布	中国雲南省・ベトナム原産とされ、日本には、桂皮（けいひ）の代用として鹿児島、高知、和歌山などの暖地で栽培され、その後一部が野生化した。 徳之島、沖縄島、久米島及び石垣島に自生している。	
樹木特性	植物全体に芳香があり、葉には明瞭な三行脈がある。温暖な地域ではニッケイやニッケなどの呼び方でよく植栽されたが、産業として発展するまでには至らず、放置され、野生化したものもある。	
用 途	葉を料理用スパイスとして桂皮は薬用として利用。	
植栽本数/面積 (植栽密度)	26 本／0.01ha (3,000 本／ha)	
特 徴	【樹形】 常緑高木で高さ 10~15m になり、枝葉に芳香がある。 葉は、互生で革質、長楕円形、先端は尖り、3 主脈は明瞭で、春には新梢の葉腋や枝先に、淡黄緑色の小花を集散花序につける。 ニッケイの花は 5 月、新葉の展開とともに咲く。葉腋から花序がのび、枝分かかれして総状の花序を形成する。花弁は 6 枚、雄しべも 6 本であるが、萼が同じような形であるので、8 枚や 9 枚のように見える。秋に、楕円形の果実が黒褐色に熟す。 ニッケイは最近ではシナモンと呼ぶ方が多くなった。元々は、「桂」の根から採取したものが肉桂であり、樹皮を桂皮（ケイヒ）、小枝を刻んだものを桂枝（ケイシ）と呼ぶ。	  
試験地での様子	山引き苗により植栽し、26 本が現存している。	
被 害	野兎・鹿の食害により上長生長が阻害された。	

【現存率】

平成 26 年に毎木調査をした結果、26 本が現存している。

【根元・胸高直径】

平成 26 年に毎木調査をした結果、平均胸高直径は 1.33 cm であり、成長スピードは遅い。

【樹 高】

平成 26 年に毎木調査をした結果、樹高は 1.28m であり、成長スピードは遅い。

《プチ情報》

ニッケイ属に属する木は、全世界でおよそ 300 種以上が属し、その分布は熱帯から亜寒帯までと広範囲であり、芳香性の成分を持つものが多く、クスノキからは樟脳、シナモンの樹皮やニッケイの根からは香料や香辛料が採れる。

ニッケイの和名は「肉桂」であり、元々は、「桂」の根から採取したものが肉桂であり、その呼び方が転じて樹木そのものをニッケイと呼ぶようになったものと言われている。

漢方では、樹皮を桂皮（ケイヒ）、小枝を刻んだものを桂枝（ケイシ）と呼ぶ。

桂皮は生薬であり、日本薬局方にも収録されており、体を温める作用、発汗・発散作用、健胃作用があり、多数の方剤に配合される。若い枝の桂枝も桂皮と同様に作用があるが、こちらは日本薬局方には収録されていない。

桂皮を含む漢方方剤は、十全大補湯、八味丸、木防已湯などがあり、桂枝を含む漢方方剤は、葛根湯、安中散、柴胡桂枝湯などである。

さらにニッケイは、お菓子やカレーのスパイスなどとして使われており、京都銘菓の八つ橋やシナモンティーなどを味わった方も多いと思います。

